

夢に向かっしゅ…

4年 K・Kくん

ぼくは、初めに本のタイトルを見たとき、海や漁業に関することなのかなと思えました。読んでみると、被災者の人たちのたくさんの気持ちが入り混じっていて、僕の気持ちも、ハラハラしたりじんわりとしたり、勇気をもらったりと色々な感情が次々と出てきました。東日本大震災の直後、大沢小学校の生徒や先生達は、「今、自分たちに行ける事は何か」を真剣に考え行動します。僕は、親や家族の安否が分からない中でも、みんなで助け合っている姿に、「自分だったら、そんな事できるのだろうか」と思いました。

海渡が、安否の分からなかったお父さんに再会できた時、嬉しい気持ちだったに違いないのに、「自分たちだけがワーワー喜ぶのは申し訳ない」と感情を押し殺している場面では、僕の心がぐっと重くなりました。

この本を読み、思い出したことがあります。

昨年十一月、僕が三年生だった時、お母さんが突然の腹痛で倒れ、救急車で運ばれて約一ヶ月入院してしまいました。最初は電話で話すこともできませんでした。お父さんは仕事で忙しく、お姉ちゃんは中学受験勉強のため、夜遅くまで勉強していました。僕は、不安や寂しい気持ちで一杯だったけれど、我慢して平静を装っていました。

そんな時、お母さんの入院を知った、お母さんの友達が、ご飯やお菓子を届けてくれ、習い事の送迎もしてくれました。その時の僕は、ほっとして安心した気持ちになりました。同時に、自分事のように心配し、助けてくれる優しさに胸を打たれました。

僕も、突然大切な家族が自分の目の前からいなくなってしまう怖さや、何もできない自分を悔やみ、悲しくなる気持ちを経験していたので、大沢小学校の生徒や先生・地域の方達が体験した、大切な人と突然会えなくなってしまう恐怖は、とても耐えがたいことだと思いました。

この本を読み終わった後、お母さんを頼りきりにしていた生活が当たり前だと思わないようにしようと思いました。感謝の気持ちを伝えるよう心がけ、その時の自分にできる事や、家族や友達のために何か行動にうつしたいなと思いました。

そして、大沢小学校のみんなが教えてくれた生き方を学び、誰かの役に立ちたいという自分の夢に向かって、この先何があっても助け合いの気持ちを忘れずに、明るい未来を生きていきたいです。